



サイクリング・風景

八嶋有司

自転車に乗ることを通じて得た知見を、個人の制作へ結びつけようと思えることが、映像・メディア表現を扱う私にとっての「クリティカル」である。とりわけ私が風景をどのように感覚し、創作の素材となるようなサンプリングを行っているのかをこの機会に考察してみたい。

自転車に乗り、まだ見たこともないような美しい風景に出会ったとき、自分が風景を発見したというよりも、ただ、風景がそこで自分をじっと待っていたというように感覚することがある。そのとき、その場所が持つ重層的な時間や、存在について身勝手に夢想する。

ロラン・バルト（1915-1980）が「明るい部屋」において「ストゥディウム (Studium)」と「プンクトゥム (Punctum)」という写真の経験をめぐる2つの対立した概念を提示したことはよく知られている。前者は、これまでの経験や文化的な知識・教養によって、写真から読み解くことが可能な一般的な情報や要素であることに対して、「プンクトゥム (Punctum)」は、斑点や針で刺したような小さな穴、刺し傷、裂け目と訳されるように、小さな細部から一般的な概念や関心を揺さぶり、写真を見る人の感情に突き刺すような要素だとしている。自転車に乗り、どこかの風景に出会うことは、写真を見る経験とはまったく異なるが、私にとって自転車に乗ることは、まだ見ぬ風景から突き刺されるような、潜在的なプンクトゥムを探求することだと言える。

自転車は加速する。言うまでもなく、ロードバイクは積極的に速い速度を維持できるようにテクノロジーを用いて設計

された自転車である。自転車はペダルを回し、タイヤを回転させることを推進力として加速する。サイクリングでは快適なライドを求めるために、凹凸のない舗装された道路を選択し、速度を維持するためにも信号がなく、交通量の少ない道を選ぶ。現代において、乗り物（車や電車など）が速度を上げることは、目的をいかに素早く処理できるかが重要とされ、目的に到達するまでの移動にかかる時間は無駄だと考えられることが多い。極力、移動そのものを無に近づけるように働きかけることが効率的だとされるが、自転車においては違う。快適なライドという言葉が表すように、むしろ移動することや運動性そのものが楽しみであり、目的でもある。従って、日本において自転車を快適に乗ることが出来る場所を求めると、都市部や住宅街を避け、郊外へ出向くことが多くなる。田舎の道路や川沿いの道、新しい道路が整備されたことで使用されることがなくなった旧道、過疎化により人口が減り交通量も減った山間の道路など。実際、サイクリング中に、なぜこんな場所に人がいるのかと戸惑い逃げる猿の群れに遭遇した経験も幾度かある。過去には主要な幹線道路だった道沿いには、既に廃業したレストランやドライブスルーの空き店舗、トンネルが開通したため使われなくなった山の道路、かつては村や集落が存在していた気配を残すダムや、古い建物。同じ地続きの日常ではあるが、私が生活を営む都市部から離れたそのような場所へ行くと、非日常的な世界に入り込んだような感覚を受ける。私が風景を見たときに感じる、風景がそこでじっと待っていたという感覚は、その場所に残る過去の痕跡や気配となる細部を受け取ってしまうことによるのかもしれない。



《屈託のない河原の巨石》



《鳥居のように佇む橋桁らしきもの》



《開かれた窓から覗く遊戯者のいない遊戯施設》



《なぜ引きつけられるのか…嘘のような風景》